

悪質な研究(者)は良質な研究(者)を駆逐する

—日本の大学(の特に文系研究室)に優秀な研究者が少ない理由—

黒田 航

独立行政法人 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター

概要

日本の大学には優秀な研究者が驚くほど少なく、国際的に見て十分に高いレベルにある研究をしていると言える分野は、理系の極く一部に限られている。これは、日本が昔から教育に非常に熱心であることを考えると、意外なこと、というより「異常」なことである。「この原因は大学に十分な予算がないからだ」と主張されることがある。私はこれが正しいとは思わない。本当の理由はほかにある。このエッセイの目的は、その理由を考察することである。私の結論は「創造性のある学生が大学に残れないような体系的悪循環が存在し、それこそが日本の大学が優れた研究者を生まない本当の原因だ」というものである。具体的な打開策は提案できないが、R. Axelrod [1] の指摘する「協調の効能」を信じ、目下支配的な勢力を構成している「質の悪い研究者」組に、目下非常に分の悪い「質の良い研究者」組が勝ちを収めるには、「良貨」たる後者が協力し「悪貨」たる前者に一致して対抗する以外には方法がないように思われる。

1 序論: 日本の大学の研究室の大半はひどく権威主義的で、閉塞的なトコロ

大学の先生方は通常人より「自由な発想」をする人たちであるように思われている。マスコミに登場する研究者の一部、例えばノーベル賞を受賞するような研究者は、確かにそうだし、理系の研究者はそういう人が多いかも知れない。自分の経験から言っても、理学部の友人には考

えられないほど頭が良くて創造的で、なおかつ人間的に豊かで常識がある人間が多かった。

しかし、大学にいるのはそういう優れた研究者ばかりではない。実際には、そういう優れた研究者は、極く極く例外的な存在である。研究者のメディアでの露出度は、典型性とは負の相関がある。人文系の研究室に巣喰っている研究者の大半は、それはもうヒドク権威主義的で、閉鎖的な人たちである。私は自分の留学経験からも、これが日本の大学の文系の研究室に顕著な現象であることを知っている¹⁾。

1.1 権威主義の蔓延する理由

権威主義的な研究者連中は文字通りの意味で、単に自分の分野の「慣例」だとか「伝統」に縋っている。そういう慣例とか伝統とかいうものの大半は、屁のツツパリにもならない、まったく取るに足りないものなのだが、彼らにはそれが判らない。彼らは現実の本当の姿を見ず、何が正しく何が間違っているのか、ゼンゼン解っていない。判断の妥当性は、事実の観察によって決まるのではなく、彼らの分野の「お偉方」が何を言っているかに全面的に依存している。

そのくせ彼らには猛烈なエリート意識があり、

¹⁾ ただし、これは私の出身研究室がそういうところだったということではない。事実は反対で、私の出身大学院の研究室は(指導教官の個性を反映して)日本の平均としては異例なほど開放的なところだったと断言できる。それからもう一言断っておくと、私のアメリカでの留学先は理系の学部だったので、文系では日本と同様な現象が認められるのかも知れない。それから最後に、私はヨーロッパの現状については何も知らない。日本の大学はヨーロッパ、特にドイツの大学を模範としていることを考えると、ヨーロッパにも日本と同じような状況があるのかも知れない。が、これは単なる推測だ。

極めて閉鎖的なコミュニティーを作り、常に部外者に対し必要以上に攻撃的である。個人的には、彼らの行動はアリやハチの行動に酷似していると思う。部外者が彼らの仕事の内容について「何かおかしくないか?」と指摘すると、「オレたちはこの道の専門家だ。素人が何を言っているんだ?」的な非常に攻撃的な拒絶反応を示す。当然、彼らは、新人の斬新で将来性のある発想を励ましたり、素人のぶっ飛んだ発想を受け入れたり、部外者の無責任な意見を歓迎したりはしない。日本の文系の学問界では、先輩は後輩を援助するどころか、将来の敵と見なして、虐待し、駆逐しようとする。ここには科学が存在するのは共益のためであること、個人の能力を超えたレベルで協力するために研究共同体が存在することなど、まったく意識されていない。

私はこれこそが日本の大学の閉塞状態を作りだしている最大の理由であると断言する。しかし、この論点の根拠となっているものに関しては少し説明が必要なので、簡単に説明しよう。

1.2 岡目八目の効能²⁾

科学の進歩を見て私が思うのは、ある研究者 *P* が本当に創造的な研究、独創的な研究をするためには条件があるということである。それは *P* 「一つのモノの見方に肩入れしない」こと、「複数の視点が可能であることを常に意識する」こと、「学派の利害に巻き込まれない」こと、「健全な懐疑主義の態度を取り続ける」こと、「前提の正しさを常に反省できる」こと、そのために「部外者」でいること、などが特に重要であるように思われる。つまり岡目八目の態度は創造性、独創性にとっては本質的に重要なのである。

科学の歴史を見ればスグに解ることなのだが、ある分野に関してド素人に近い人物が専門家から見たらぶっ飛んだ案を出したことによって起こった偉大な進展の、何と数の多いことか。アインシュタインの相対性理論はその最たる例だ。彼は物理と数学の素養は十分にあったが、控えめにいっても専門的な物理学者ではなかった。

同様の場合として、専門化が進んだ分野では、隣接するが異なった分野に移って創造的な仕事をする研究者の例が多い。これも一種の「素人の強み」という形で理解できるはずだ。

実際、自分で教壇に立って実感するのは、ド素人の素朴な疑問が本質的な疑問であることである。極端なことを言えば、学問でイチバン恐ろしいのは、ド素人の素朴な疑問であるとも言える。素人には先入観がない。それが岡目八目を助け、従来になかった新しい視点から問題を眺めることを可能にし、それが「素人の強み」となって発揮される。これがド素人に近い研究者に創造性、独創性に顕著な理由であるように思われる。

これは言語学者に向かって特に言いたいことだが、あなたがたの英雄であるチョムスキーが学壇に登場した時、彼は重鎮連中からド素人扱いされたことを忘れてはいけない³⁾。

1.3 権威主義が害悪である理由

権威主義は創造性や独創性と真っ向から対立する。日本の研究者に創造性、独創性が欠如しているのは、彼らの「家」となっている日本の大学の内部が多かれ少なかれ権威主義の温床だからである。

重要な点を繰り返す: 独創性のある研究、先駆的な研究はド素人に近い人物、岡目八目的視点、複眼視のできる「部外者」によってなされることが多いが、日本の大学の研究室では、このような萌芽的な研究を奨励、育成しない。そのうえ、ド素人の斬新な発想を受け入れない。他分野からの創造的な横槍を歓迎しない。これは致命的な欠陥である。

エリート意識が高く、なおかつ権威主義的傾向の強い連中は、もう見るも無残なくらい「先入観の塊」である。彼は事実に基づいた、マトモな議論というものができない。彼らは自分らのモノの見方にあわないものは、一切受け入れない。彼らは事実の正しい認識の方法を獲得す

²⁾ この節の内容は、07/04/2004 に加筆された。

³⁾ もっとも、彼は恩師の Z. Harris の威光でずいぶん得をしているように思うが。

るの必要なはずの貴重な時間や労力を、下らない先入観を習得するために費やす。これは偉大な労力のムダである。

このような事情があってみれば、日本の大学の研究室(特に人文系の研究室)が創造性の光というものがまったく届かない、昼なお暗い深海のような場所になっているのは、当然だ⁴⁾。

1.4 偉大な悪循環

要点を纏めよう。今の日本の大学内部、特に文系の学部には本質的な悪循環がある。この悪循環のことが言いたくて、私は今、このエッセイを書いている。

文系の研究者が大学に残るのは「理不尽に対するガマン較べ」だと言われる。

大学には毎年、相当数の学生が入ってくる。中には非常に優秀な資質をもつ人物もいる。しかし、それらの優れた、将来性のある若い人たちは、ほとんど大学に(生き)残らない。大学に残って研究者になったら、将来きっと創造的な仕事をする期待できるような優秀な人物は、「どうしても、ワタシはこの分野の研究がやりたい、いや、やらねばならない」的な使命感がない限り、大学には残らない。特に文化系ではこの傾向が顕著だ。

これはあまりにもったいないことである！

だが、それはあいにく、事実なのだ。なぜか？

その理由は明らかに、彼ら「有能な研究者の卵」が大学(とりわけ大学院)での生活条件が自分らに合っていないと感じるからである。

創造的で優秀な人物ほど、権威主義的で、閉鎖的な状況を嫌い、自由な研究・生活環境を好む。これは多くの調査によって明らかにされている事実である。しかし、彼らに提供されているのは、その正反対な条件なのである。素人を見下す鼻持ちならないエリートを露呈させている権威主義の塊が自分の専攻した分野の「番人」であってみれば、そういう奴らにつきあうという「理不尽な苦痛」に耐えてまで研究者になろうと

いう人がほとんどいないのは、当たり前である。結局、大学に残って研究者になったら、将来きっと創造的な仕事をするだろうと期待できるような優秀な人物は、特別で例外的な動機、例えば「どうしても、ワタシはこの分野の研究がやりたい、いや、やらねばならない」的な使命感がない限り、大学には残らない。

が、皮肉なことに、こういう「思い込みの強い」連中はしばしば、エリート意識が強い、権威主義的な連中でもある。

こうして、有能な研究者の卵は体系的に研究分野から「駆除」され、無能な研究者が再生産される。これは何とも偉大な悪循環だ。

1.5 結論

新人の独創的な発想を励ましたり、ど素人の斬新な発想を歓迎したり、部外者の無責任な意見を受け入れたりする環境ができ上がらない限り、日本の大学は死んだままであり、今後ますます死んでゆくであろう。

それは本当に確実である。荒木飛呂彦⁵⁾風と言うなら「コーラを飲んだらゲップがでると同じくらい確実」である。

2 おわりに: 現状を打破するために、何をすればよいのか？

以上のような悲惨な現状は、はたして正しく認識されているのか、私は甚だ疑問に思う。一部の大学教官は真面目に講義をしない。そんなことで本当にイイのか？

2.1

私が在学していた某大学の美術・美術史学の講義の一つは「写経の時間」と呼ばれていた。それは当時の担当教授(今はすでに退官している)が自分のノートを一文一文朗読し、学生がそれを一文一文ノートに写すための時間だったからである。私はたった一度だけこの授業に参加した。当然、二度と出席しなかった。それが卒業に必要な単位かどうかなど、私には関係なかつ

⁴⁾ 確かに深海魚のグロテスクさは、それはそれで見ていて楽しいのだが、彼らを一緒に生活するとすると、話は別である。

⁵⁾ 宮城県出身の漫画家。代表作は『JoJoの奇妙な冒険』(集英社)

た．こんな学生をバカにしきった環境から本当に創造性のある研究者が育ってくるとは到底思われぬ．

日本の大学に優れた研究者がいない「本当の」理由は「予算が不十分で、一段上の生活水準を指向する学生に魅力がない」からではない．研究者を志すような人間は、お金の問題を度外視するような、どちらかと言うと「善意の人」が多い．それにも係わらず、そういう資質のある人が残れないような状況が体系的に生じている．これこそが日本の大学が、同規模の外国の大学に比して創造的な研究者を輩出しない「本当の」理由であると、私は考える．

2.2 ああ、独立行政法人化

独立行政法人化には賛否両論がある．実際、その是非は一概には決めかねる問題である．

私が今まで考察してきた大学の惨状は、大学が従来、文部(科学)省へ寄生的立場を取ってきたことに端を発している可能性が強い．「大学の自治」の名の下に外部評価の伴わない「エセ研究」を長らく醸成し、研究環境を腐敗させていた可能性は、確かにある．従って、研究室にこびりついている権威主義の残滓を大学から除去し、研究能力の高い研究者が住みやすい環境に作り直し、結果として優れた研究者の卵を選別する効果につながるなら、大学改革に現状の改善の効果を見込めるのではないかと、私も期待している．

ただ、私はまったく楽観していない．独立行政法人化は賭博的な要素が多すぎる．日本の大学が知的生産物を管理する企業になり切れるかどうかは、実際には非常に怪しい．資金確保に理不尽な制限が多すぎる．日本の場合、卒業生の大学への寄付金には理不尽な税金がかかる．税制がうまくいっていないことのツケが、独立行政法人化という形で遠回しに回ってきているだけ、とも言える．

ただ、独立行政法人化の悪を言う以前に、日本の大学は今のままでは本当にどうにもならないだろう．独立行政法人化は多くの大学にとって薬になるより毒になる可能性が圧倒的に高い

が、死にかけている病人は薬になる可能性が少しでもある限り、それを服用するのは不可避なのだろう．毒か薬かわからないものでも、飲まなければ死ぬのは、もはや明白なのだから．

2.3 良貨の生き残る道

けだし「悪貨は良貨を駆逐する」は真実である．だが、悪貨に対する対抗策がまったくないワケではない．R. Axelrod [1] の言う「協調の効能」を信じるならば、今のところ分の悪い「良貨」組も協力すれば、大学に巣食う「悪貨」組に対抗できるはずだ．いや、「良貨」が生き残る道は、実はそれしかないのだ．

参考文献

- [1] Axelrod, Robert (1985). *The Evolution of Cooperation*. Perseus Books. (邦訳: 『つき合い方の科学: バクテリアから国際関係まで』. 松田裕之(訳). ミネルバ書房.)